

かながわ畜産まめ知識

かながわの酪農

来歴



牛は大陸からの帰化人とともに日本に来ましたが、その乳は貴族達の滋養薬（酪・蘇・醍醐：ラク・ソ・ダイゴ：ヨーグルト・バター・チーズと推定）として利用され、庶民には手が届かないものでした。（「醍醐味」は醍醐の味わいから転じた言葉とされる）

その後、徳川将軍吉宗が千葉県で、インドの白牛から医薬用として乳を利用したことは有名です。しかし、神奈川農林統計協会発行の「かながわの特産物」によると、横浜開港により外国人が増え、畜産物の消費も増え始めた慶応2年（1866年、63年の説もあり）、千葉県出身の前田留吉が、オランダ人スネールより乳用牛の飼養管理技術の伝習を受け、横浜市太田町（現在の中区山下町）において和牛を飼養し、外国人や役人を相手に搾乳・販売を始めた、とあります。これが日本人による民間牛乳販売業者第1号とされており、近代酪農の発祥といえます。

また、明治元年（1868年）頃の牧畜業が始められた当時は、和牛（主に房州牛、南部牛、大島牛等）を搾乳用に利用していましたが、その後外国から、乳用種のホルスタイン種等が導入されました。

平塚市など旧中郡周辺地域では、横浜市周辺の搾乳業者の牛について育成期間や分娩前の数ヶ月（搾乳休止期間）受託管理をしていました。この受託管理により乳用牛飼養管理技術を習得し、後の酪農経営の振興につながったと考えられます（現在も平塚市・伊勢原市など県を中心部で酪農が盛んです）。

そして、大正元年頃から農家による自家搾乳が始まりました。

参考「かながわの特産物」／神奈川農林統計協会
「牛乳百科事典」／(社)日本酪農牛乳協会ホームページ

※第一回

「全国日本ホルスタイン種牛共進会」の開催

昭和26年3月24～27日、乳用牛の改良の成果を酪農家同士で競いあう、記念すべき第一回共進会が神奈川県（平塚市競輪場）において開催されました。

北海道からの出品者がさすがに多かったものの、全国からよりすぐりの乳用牛達が集まり、昭和天皇陛下の御臨席のもと、大変盛大に開催されました。



当時のポスター(左)と開催のようす(右)

※第一回全日本ホルスタイン種牛共進会記念アルバム／(社)日本ホルスタイン登録協会 より

◎日本のアイスクリーム発祥の地

横浜市は日本のアイスクリーム発祥の地でもあります。

明治2年（1869年）、旧旗本の町田房蔵が、横浜・馬車道で「氷水店」を開き、日本人として初めて牛乳、卵、砂糖で作ったシャーベット状のアイスクリーム「あいすくりん」を製造販売しました。

ところが、当時外国人は食べたものの、日本人は観るだけであったことから、この時の商売は失敗に終わりました。しかし、お祭りで再び販売したところ繁盛を極めたといわれています。

馬車道通りにある太陽の母子像には、アイスクリーム発祥の碑文が刻まれています。



太陽の母子
(アイスクリーム発祥の碑)
横浜市ホームページより